摂南大学教育学研究
No.18

実践報告

授業のユニバーサルデザインに関する一考察

松　浦　正　典*

A Study on Universal Design in Classes

Masanori MATUURA

【要　約】
校内研修として、令和２年度～令和３年度に授業のユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善に取り組んだ小学校の実践報告である。まず、授業のユニバーサルデザインについて学んだ後、全教職員でユニバーサルデザインのチェックリストを作成した。それを元に予想されるつまずきに寄り添って支援を準備し、さらに通級指導教室の協力を得て、支援の必要な児童にあらかじめ補充的な指導を行っていった。約１年半の実践により、児童の様子に様々な変容が見られただけでなく、教職員が通常の授業にもユニバーサルデザインの視点を持って、授業を工夫するようになり、指導力の向上に大変有効であった。

* 千葉県野田市立宮崎小学校

Ⅰ　はじめに

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課は、「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」（平成24年12月５日）で、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が平成14年に行った調査においては６．３％であり、今回の調査でも推定値6.5％という数値になっている報告とした。つまり、通常の学級において、30人に１～２名が特別な教育的配慮を必要とすることになる。

授業の内容を理解することができず、学習に取り組むことができなかったり、離席を繰り返したり、周りの友達にちょっかいを出したりする児童生徒が、多くのクラスに在籍している。そのため授業を成立させることができず、悩んでいる教職員も少なくない。

その現状を受けて、「授業のユニバーサルデザイン化による授業改善」の取り組みが全国の学校で行われている。この研究では、校内研修として授業のユニバーサルデザインの研究に取り組むＡ市立Ｂ小学校での実践を通して、教職員や児童の変容をまとめ、その有効性について考察していきたい。

Ⅱ　授業のユニバーサルデザインとは

ユニバーサルデザインの考え方は、もともとは建築や施設などからきている。アメリカ合衆国のノースカロライナ州立大学のロナルド・メイス博士が中心となって提唱した。「年齢や能力、状況などにかかわらず、できるだけ多くの人が使いやすいように、製品や建物・環境をデザインする」という考え方である。

この考え方を授業に取り入れたものが「授業のユニバーサルデザイン」である。桂（2011）は、「国語授業のユニバーサルデザインとは、学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、全員の子どもが、楽しく「わかる・できる」ように工夫・配慮された通常学級における国語授業のデザイン」としている。また、小貫（2014）は、「発達障害がある子だけでなく、すべての子にとって参加しやすい学校、わかりやすい授業であること」としている。また佐藤（2010）は「LD 等の子どもには、「ないと困る支援」であり、どの子どもにも「あると便利な」支援をふやすこと」と定義している。

Ｂ小学校では、研究主題を「わかる・できるを実感できる授業の工夫」とし、授業のユニバーサルデザインの研究をおこなった。それと並行して「人的環境のユニバーサルデザイン」「学校・教室環境のユニバーサルデザイン」についても全校で研究・整備していった。

Ⅲ　実践の様子

１　研究対象校　Ａ市立Ｂ小学校

２　研究期間　　令和２年４月～令和３年10月

３　児童の実態

Ａ市立Ｂ小学校の全校児童は、令和２年５月１日時点で487名在籍（うち特別支援学級16名）、市内では中規模校の学校である。１年生と４年生が２クラス、その他の学年は３クラス、特別支援学級は、知的障害学級２クラス、自閉・情緒障害学級１クラスである。また通級指導教室

が３教室開設されている。

児童は、明るく素直で、何事にも一生懸命に取り組む姿が多く見られる。係活動や委員会活動には意欲的に取り組み、教職員や友達の手伝いを進んで行おうとする児童も多い。授業中も、与えられた課題に対して意欲的に取り組もうとしているが、自ら積極的に発言できる児童がいる中で、自信がないと挙手ができない、自分の考えを全体の前で話すことに抵抗のある児童も多くいる。

４　１年目の研修の概要

（１）研究の方向性

研究を進めるにあたり、まず授業のユニバーサルデザインについて研究するために、研究先進校の実践を学ぶとともに大学の教員等を講師として招聘し、講演会形式の研修会を４回行った。また、数々の研究実績があり、書籍等も出している日野市立日野第三小学校の実践を研究先進校として学ぶことにした。しかし、新型コロナウイルス感染症流行のため、公開研究会が開催されず、直接指導を受けることができなかった。そこで昨年度の研究紀要を取り寄せ、それを読み込むことで、研究にかえた。

また、教科としては、先行研究の多い国語科の授業のユニバーサルデザインについて、全校で取り組むこととした。

指導案の書式として、下記の通り「本時の展開」の項目のなかに、予想されるつまずきと、ユニバーサルデザインの視点による指導の工夫、個別の指導・補充的指導の項目を入れた。これは予想されるつまずきから指導の工夫、個別の指導・補充的指導を準備するという考え方を反映したものであり、日野第三小学校の指導案をまねたものである。（図１参照）

図１　本時の展開の項目

過程時配	学習活動と予想される児童の反応	★予想されるつまずき	指導の工夫と評価 ☆焦点化□視覚化△共有化 ◇評価	●個別の指導 ○補充的指導

※　個別の指導は教室で担任がする個別の支援を指し、補充的指導は、通級指導教室の担当が行う個別の支援を指す。

（２）校内授業研究会について

11月に２年生（低学年部会）と３年生（中学年部会）が、12月に６年生（高学年部会）各１クラス、１単位時間授業を公開し、校内授業研究会を行った。

なお、表１はＢ小学校の教職員が考える授業のユニバーサルでの支援例をチェックリスト形式でまとめたものである。実際の授業ではこれをもとに支援を準備した。

表 1

授業のユニバーサルデザイン

視覚化	
□	単元の流れを掲示しているか
□	動作化・劇化を行っているか
□	イラスト・図・表を活用しているか
□	デジタル教科書を活用しているか
焦点化	
□	つけたい力を見極めているか
□	ねらいを絞っているか
□	活動を絞っているか
□	発問を絞っているか
□	指示を絞っているか
□	しかけを活用しているか
共有化	
□	ペア学習・グループ学習を取り入れ、学び合いが成り立っているか
□	話し合いのルールは明示されているか
□	学習形態は工夫されているか
□	ソーシャルスキルを指導しているか
□	友達の発言を説明するなどの活動が行われているか
学び方	
□	スモールステップは取り入れられているか
□	スパイラルな活動（既習事項を生かす）が行われているか
□	適用化（応用・汎用）が行われているか
□	一定の流れで行われているか
□	15分の活動× 3 のような時間の工夫がされているか
□	書くとき・聞くときを分けているか
児童理解	
□	個に合わせた課題が準備されているか
□	短期記憶の差に配慮されているか
□	目の使い方に注意してみているか
□	個々の困り感を把握し、配慮しているか
授業の構成	
□	授業の流れが、明示されているか
□	めあて（学習課題）が明確か
□	時間設定が適切か
授業の基本スキル	
□	表情は豊かか
□	声（量・トーン）は適切か
□	目線を意識し工夫しているか
□	立ち位置・巡視は適切か
□	児童への対応と応答が適切か
□	指示が明確か

□	メリハリがあるか
教材・教具、板書	
□	ICT が適切に活用されているか
□	ノートと板書が対応しているか
□	ノートの使い方は指導されているか
□	板書の文字の大きさ・行間は適切か
□	色チョークの使い方は適切か
□	忘れ物への対応が適切か
□	ワークシート（使う場合）は工夫されているか

人的環境のユニバーサルデザイン

教　　師	
□	温かく、受容的か
□	児童の発言を肯定的に受容しているか
□	つぶやきを上手に受け止めているか
□	グループを工夫しているか
□	座席を工夫しているか
□	見本となる接し方をしているか
□	話過ぎていないか
□	教材が工夫されているか
学級の児童	
□	言葉遣いが適切か
□	認め合いができているか
□	集団に肯定感があるか
□	困っていること・わからないが言えるか
□	ほのぼの言葉を使っているか
□	良いところ探しをしているか
□	各自の役割があるか
本　　人	
□	自己肯定感・自己有能感があるか
□	教室に安心感があるか

学校・教室環境のユニバーサルデザイン

時間の構造化	
□	１日のスケジュールは明示されているか
□	１時間のスケジュールは明示されているか
□	タイマーの効果的活用はされているか
場の構造化	
□	座席の配置は適当か
□	整理整頓はされているか
□	ものの場所の明示がされているか
□	前面がすっきりされているか
□	机の中が構造化されているか

□	机の上が構造化されているか
刺激量の調整	
□	必要のない音が調整されているか
□	板書の量・質は適切か
□	声の大きさは適切か
ルールの明確化	
□	必要な既習事項を明示してあるか
□	掲示物等の色使いは適切か
□	風でめくれないか
□	大きさデザインの統一感はどうか
表示	
□	かさ・くつの入れ方が明示されているか
□	清掃用具の片付け方が明示されているか
□	右側通行が明示されているか
□	走って移動しないことが明示されているか

5　2年目の研修の変更点

（1）研究する授業について

１年目は国語科に絞って研究を行ったが、２年目は各学年で希望する教科で各研究することとした。１年生・２年生・６年生及び特別支援学級は引き続き国語、３年生・４年生は算数、５年生は理科となった。各学年１～２回公開授業研究会を行う。

（2）B小UDスタンダードについて

令和２年度末の人事異動で新たに、10人の教職員が異動してきた。昨年度の積み上げがないこの10名については、授業のユニバーサルデザインについて知り、理解を深めるために、昨年度からいる教員には振り返りの意味も含めて、校長がユニバーサルデザインについて大切だと思うことについて、A４サイズ１枚にまとめた「B小UDスタンダード」というプリントを全校の教職員に配付した。発行は不定期である。

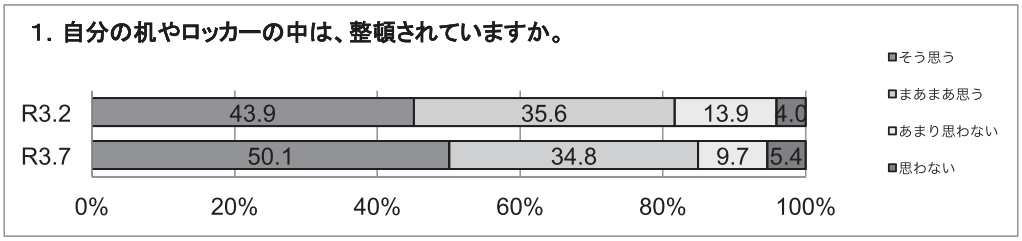
（3）授業研究会について

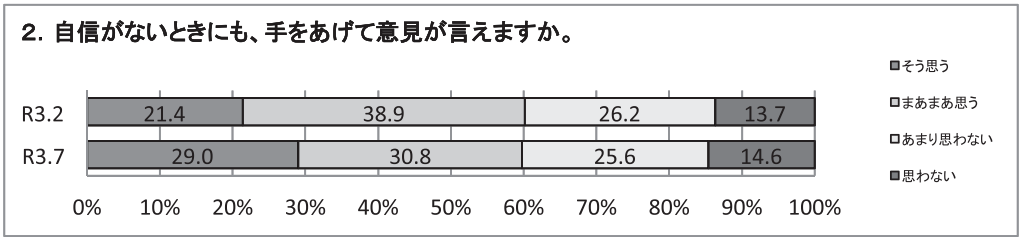
11月に市内の小中学校に向けて、公開授業研究会を行う予定である。

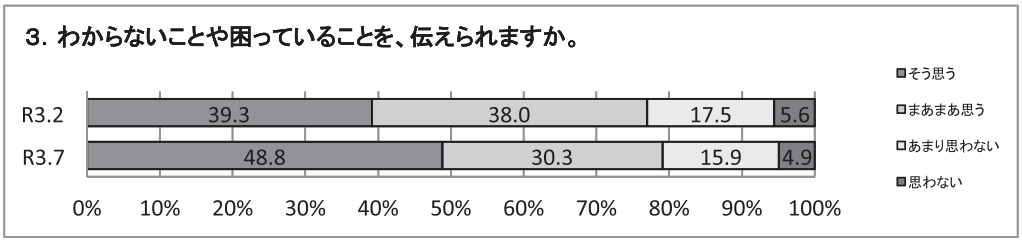
Ⅳ　児童へのアンケートの結果

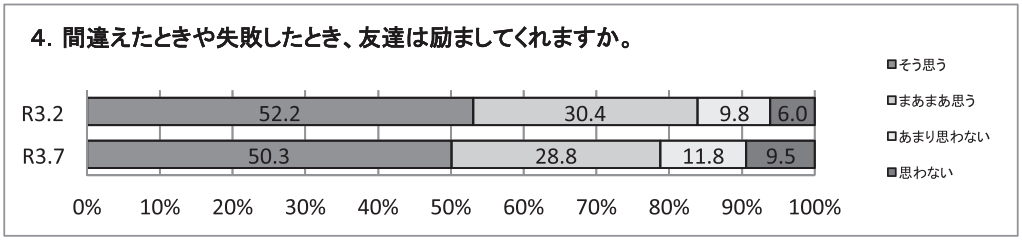
令和３年２月と７月に全在籍児童を対象に２回実施し比較した。なお、２月時点の在籍児童数は485人、７月時点の在籍児童数は465人であった。ただし入学・卒業等により入れ替わるため、必ずしも全員が同一の児童ではない。

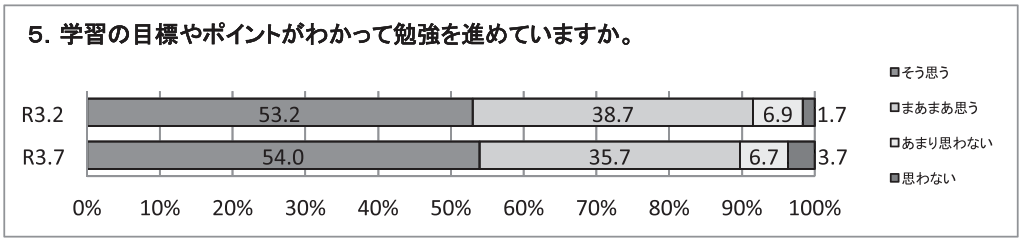
グラフ　アンケートの内容と結果

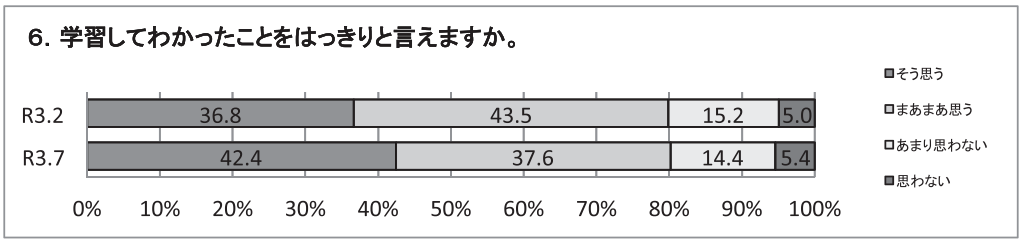


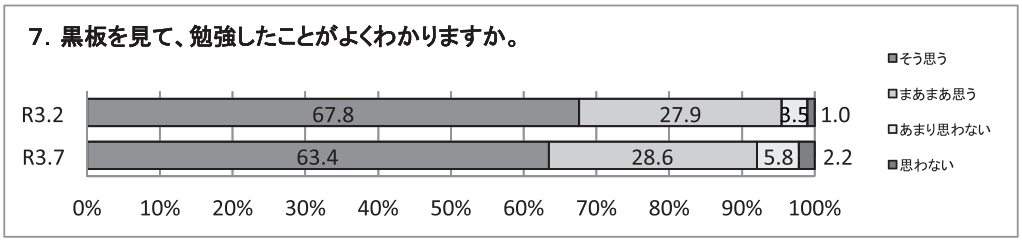


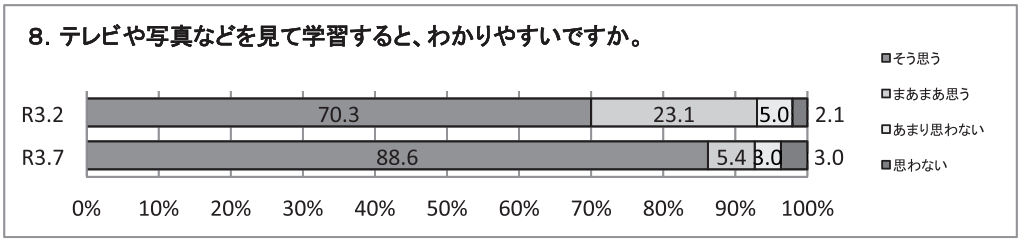


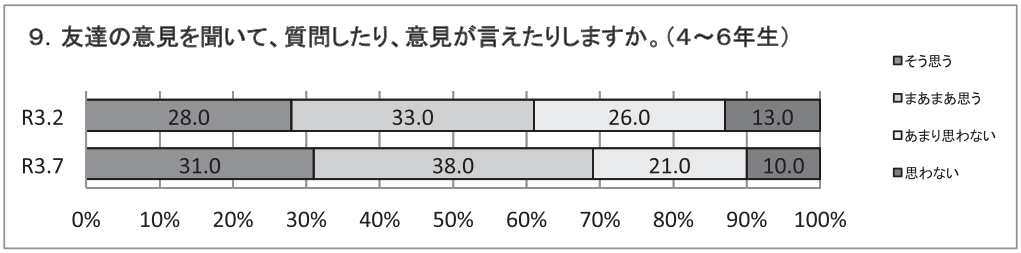


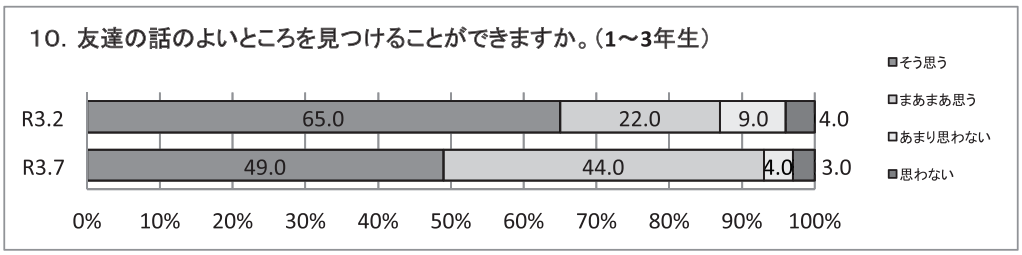


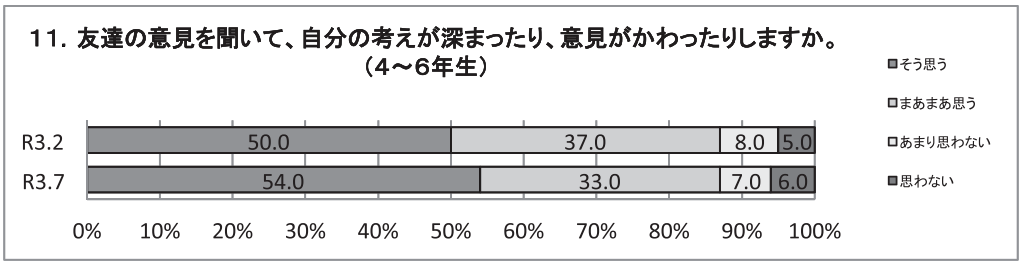












Ⅴ　教職員へのアンケートの結果

令和３年10月に２年間の校内研修の成果と課題について、教職員21名に自由記述でアンケートをとった。以下はそれを児童に関すること・教職員に関すること・両方に分けてまとめたものである。なお、（　）の中の数字は同様なことが記述された人数である。

1　成果

対象	記　述　内　容
児童	・刺激量の調整で集中力が増した。 ・児童が見通しを持って学習に取り組むことができた。 ・掲示物の量を調整したことで児童の集中が増した。 ・動作化を取り入れることで、言葉や文章の理解が深まった。 ・研究教科である国語科好きの児童が増えた。 ・通級指導教室と連携した補充的指導により、個別の支援を必要とする児童が安心して取り組むことができた。 ・意欲的に挙手する児童が増えた。 ・「わかった」という声がよく聞こえるようになった。 ・教室の整頓が当たり前になり、児童が落ち着いて生活できるようになった。
教職員	・「視覚化」「共有化」「焦点化」の観点を明確にすることで活動内容や目的がはっきりとした。（8） ・わかりやすい授業・過ごしやすい教室をつくろうという意欲が高まった。（2） ・今まで知らなかった指導法やアイディアが学べ、普段の授業に積極的に散り入れている。 ・板書や掲示物での色の使い分けを工夫するようになった。（4） ・掲示物の精選をした。 ・１時間の流れを示している。 ・動作化など視覚化の工夫を取り入れている。（2） ・児童のノートを意識した板書をするようになった。 ・実物投影機の活用など視覚化の工夫を図るようになった。（3） ・どの児童も理解しやすい導入を工夫するようになった。 ・短く明確な指示を出す（3） ・通級との連携を強く意識するようになった。
両方	・掲示物の工夫で学習のゴールが明確になった（2） ・タイムタイマーの活用で時間に対する意識が高まった

2　課題

対象	記　述　内　容
児童	・低位の児童に合わせて授業をしてしまうため、学力の高い児童がへの支援ができていないときがあるため、何もしない時間ができてしまう。
教職員	・共通理解を学年間や通級指導教室との間で図る時間の確保が難しい。（2） ・授業の準備が大変。（4） ・教室のつくりが違い、掲示物などの統一が難しい。 ・ＩＣＴのさらなる活用が必要である。 ・個々にあった指導計画を立てる必要がある。
両方	記載なし

Ⅵ　分析及び考察

1　児童へのアンケートについて

1.「自分の机やロッカーの中は、整頓されていますか」では、「そう思う」「まあまあそう思う」が全体で84.　9％となり昨年度よりも５％以上増加していた。この研究を進める中で、学校全体で環境を見直し、持ち物を置けるスペースを整備した結果だと思われる。学校全体での

取り組みが個の支援に生きたことになる。

３.「わからないことや困っていることを伝えられますか」では、「そう思う」「まあまあそう思う」が79.　１％に増加した。これも学校全体で「わからないと言える学級の雰囲気作り」に取り組んだ成果と考える。９・10の結果より友達の話をしっかり聞ける児童も育っていると思われる。

反面、５.「間違えたときや失敗したとき、友達は励ましてくれますか。」では前年度より「そう思う」「まあまあそう思う」が減少している。これは進級に伴い学級のメンバーが替わり、さらに新型コロナウイルス禍で友達との接触が極度に制限されたことも関係していると考えられる。

２　教職員へのアンケートについて

授業のユニバーサルデザイン化を進める中で、「集中する力が増した」「わかったという声がよく聞こえるようになった」「動作化を取り入れることで言葉や文章の理解が深まった。」「通級指導教室と連携した補充的指導により、個別の支援を必要とする児童が安心して取り組むことができた。」「わかったという声がよく聞こえるようになった。」「教室の整頓が当たり前になり、児童が落ち着いて生活できるようになった。」などの児童の変化をあげるだけでなく、「ユニバーサルデザインの定義や視点を学ぶことで、教室環境や人的環境を整えようとする意識が高まった。」「児童のノートを意識した板書の工夫をするようになった。」「実物投影機の活用など視覚化の工夫を図った。」「短く明確な指示を出す。」など教師自身の変化をあげている。

これらのことから、約２年間に及ぶ授業のユニバーサルデザインの研究は児童にも、教職員自身にも大きなプラスの変化をもたらしたと教職員が感じていることが分かった。

また、「学力の高い児童への対応」「ICT のさらなる活用」などの問題点も見えてきた。

Ⅶ　おわりに

学校現場での１年間以上の実践研究は、年度が替わると児童や教職員のメンバーが替わるため、授業のユニバーサルデザインが児童にどのような変化をもたらしているかを客観的に分析することは困難であった。また、研究した期間は新型コロナウイルス感染症予防のため、学習形態・児童同士のかかわり方などいろいろな制約もあり、通常の学習環境とは大きくかけ離れていた。

しかし、研修を通して授業のユニバーサルデザインの視点を持ち、授業研究会だけでなく通常の授業でも「予想されるつまずき」に寄り添って支援を工夫することで、児童の姿も少しずつ変化した様子がうかがえた。この実践研究が、児童の成長や教職員の指導力等の向上に大変有効であったと言えるだろう。

今後も、「わかる」「できる」を児童も教職員も実感できる授業を行うため、授業を工夫していくことが必要であろう。

参考文献・引用文献

・日野市立日野第三小学校研究紀要　(2019)
・桂　聖　国語授業のユニバーサルデザイン（2011）
・小貫　悟・桂　聖　授業のユニバーサルデザイン入門（2014）
・佐藤　槇二他　通常授業のユニバーサルデザイン（2010）